

エッグショックの今だからこそ考えてみる 日本版アニマルウェルフェアの在り方

株式会社愛鶏園 代表取締役会長 齋藤大天

鳥インフルエンザの大発生！飼料高騰！エッグショック！鶏卵高騰が消費者を直撃！これが2023年8月現在の採卵養鶏業の状況です。

弊社は神奈川県横浜市で採卵養鶏業を営み始めて今年で創業98年目になります。私たちの創業の原点は、『この栄養豊かなたまごをいつでも誰でも安心して食べられるような世の中にしたい』です。

初代が養鶏を始めた昭和初期は日本もまだ非常に貧しく、東京や横浜などの大都市圏では実に消費用のたまごの9割を中国から輸入していました。当時の飼い方は土間に平飼いで飼うやり方が主流で、餌を食べる場所と糞をする場所が一緒に衛生状態も悪く、鶏病・寄生虫の発生も多く、生産性も悪いため、たまごは高価でなかなか手に入らない貴重品でした。それから飼育方法が平飼い方式からケージ方式に変わり、飼養技術や衛生管理も向上し、生産コストは劇的に下がり、「物価の優等生」と言われるまでになりました。

日本の採卵養鶏業の歴史は、鶏病や病原菌との戦い、食中毒菌との戦いの歴史です。欧米地域と比べて高温多湿であり、また世界でもまれな「卵を生で食べる食文化」がある我が国において、鶏の居住場所と鶏糞の分離は衛生管理上とても大切なポイントになります。私たちは、国土の狭い我が国において、この栄養豊かなたまごを安定的に適正な価格で供給するために、今の生産方式が築き上げられてきたことに誇りと責任を持っています。

今、欧米諸国などの一部の先進国では家畜

の福祉を考えるアニマルウェルフェア(以下「AW」)の活動が活発化し、より広いスペースや平飼い方式等を求めています。その考え方に理解できるところもあるし改善の余地はまだあると思いますが、それらを一律に法律で規制化したり、買う側が一方的に強制したりする動きには違和感があります。

日本では(公財)畜産技術協会が作成した「AWの考え方に対応した家畜の飼養管理指針」において、「日本の養鶏業の成り立ちや現場を理解し、ケージ方式・平飼い方式など施設の構造や設備の状況ではなく、AWへの対応において最も重視されるべきは、日々の家畜の観察や記録、家畜の丁寧な取扱い、良質な飼料や水の給与等の適正な飼養管理により、家畜が健康であること」としています。私たちはその考え方に賛同しています。

鳥インフルの大発生で約一割の鶏が殺処分され、価格が約五割高騰し、エッグショックと連日騒がれています。でももし、一部の欧米諸国で求められているような極端なAWをこの国土の狭い日本で取り入れた場合、価格の高騰はそんなものでは済まされません。

ケージ方式・平飼い方式それぞれに長所と短所があります。大切なことは、風潮に流されず、消費者がそれらの正確な情報を踏まえた上で自由に購買するものを選択できること、そして私たち生産者自身が自分たちの行っている仕事に誇りと責任を持つことだと思っています。

(さいとう だいてん)